－所蔵作品紹介－

戸村　浩　TOMURA Hiroshi

旭の川

あさひのかわ

作品データはこちら

旭の昇る/旭の川には/そこここに橋が架かり/生き生きと/魚達が泳いでいる。

ここにあげた作品が「はこで考える―あそびの木箱1992－93」展（当館ほかで開催）に出品されるにあたり、作者はこのようなコメントを寄せてくれた。「旭の川」であちこちに橋があるといえば、もちろんわが旭川市のことである。

作品の形状も一見して、タイトルとの関連を納得させる。球体は太陽つまり「旭」で（ただし展覧会出品時は球体が二つ）、三つの曲線は漢字の「川」だ。

しかもこの旭と川は、展覧会の出品規約どおり「箱」の機能をもつ。旭を開くと椀が二つと椀座が入っており、川には箸と箸置きが。その箸置きは魚の形で、箸が橋なのである。

あそび心が楽しい一作だが、ここには伝統的な木工の味わいも生きている。拭漆がほどこされたタモの材質感には古風な美しさがあり、また椀を容器に収めるという構造は昔の「箱膳」を思い起こさせよう。

ところで、「球」は作者にとってこだわりのある形らしい。作者は数学関係の雑誌に長く寄稿しているが、そのなかで様々な正多面体と球が内接外接の関係にあることに触れ、それは「思いもかけない、数の秩序の不思議だ」と述べている（戸村浩『時空の積木』）。椀を包んだ「旭」もまた、秩序ある図形の世界を、いわば数の世界におけるひとつの小宇宙を包む可能性を潜在させているのだろう。とすれば球とは、「四角い箱」の通念から外れてはいるものの、「何かを納める」という箱の本質を決して損なう形ではない。それどころか、秩序を求める心には最も理想的な形の箱として映るかも知れない。

作者の戸村浩は1938（昭和13）年、中国天津生まれ。桑沢デザイン研究所インダストリアルデザイン科を卒業し、柳工業デザイン研究会で柳宗理に師事。1970年に同社を退社後、作家活動に入っている。「あそびの木箱」展にはこれまで開催された1981年（北海道立近代美術館）、1987年（当館）、1992年の全３回とも出品しており、第２回目には奨励賞を受賞した。

旭川美術館だより「氷華」No.36（1995.11発行）「収蔵作品から」より